

年次別天気分類

天気 年度	快晴	晴	曇	雨	雪
34年	61 ^日	137 ^日	101 ^日	58 ^日	8 ^日
35年	72	141	98	49	6
36年	47	165	91	62	0
37年	72	146	90	50	7
38年	41	166	109	45	4
合計	293	755	489	264	25
年平均	58.6	151	96.6	52.8	5
割合%	16.0%	41.3%	26.8%	14.5%	1.4%

二、災害

わが国はその位置、地形や気象条件のために、毎年多くの自然の災害による被害を受けている。おもな自然災害には台風や豪雨による風水害・干害・落雷・ひょう・地震・津波・雪害等々ながら災害の見本市のようである。また最近では、気候の寒冷化にともなう異常気象も心配されている。

歴史をひもといてみると災害がその当時の歴史の動きに大きなウェイトを持っていたことがわかる。災害による庶民生活の混乱は数多く、そのために政治の変革をもたらしたこともしばしばである。自然の災害に対する施策は為政者の大きな政治的手腕とされてきた。

藩政時代の災害は、農民を貧困のどん底と死の恐怖に追いやった。しかも藩の救済は不十分であり、飢えと重税にあえぐ農民たちによって随所に一揆が起きた。それは幕藩体制そのものをゆり動かしたほどであった。

年降り明治・大正となっても災害による被害は大きかった。人々は天災と言うことばであきらめ、いたしかたないものとして、その後の復旧に黙々と立ち向かってきた。

現代では、国や県、市町村の防災対策が積極的に推進された結果、自然災害そのものは起こっても被害はかなり食い止められるようになった。たとえ自然の猛威によって大きな被害が生じて、社会保障制度の普及や災害救助法のような国の施策によって、被災者の生活や復旧を援助するようになった。

最近開発という名のもとに、いわゆる自然破壊がなされているケースもある。自然の災害を人為的に増幅している

のではないかと批判の声も聞かれる。本町では、このような乱開発による災害の増大というようなことは見られない。

災害の歴史を調べるに当たっては、稿本一本松町史をはじめ

め本町関係のいろいろな文書を開いてみたり、古老の話を聴取したりしたが十分ではなかった。本町以外の関係書物や他町村の史料等も参考にさせていただいて、一応次のような災害年表を作った。

一本松町災害年表

災害発生年月	種類	災害状況
一六四九(慶安二)・二	地震	宇和島藩一帯
一六六六(寛文六)・夏	大洪水	田畑の損害甚大
一六七〇(寛文一〇)・六・二三	洪水	田畑の被害(流失)大
一六七三(延宝元)	大暴風雨	洪水による田畑の流失
一六七六(延宝四)・七	大暴風雨	風雨激しく、田地の流失
一六七九(延宝七)・七・一〇	大風雨	雨風激しく御荘の村々の井手残らず被害を受ける。
一七八〇(延宝八)・八・三〇	大洪水	田畑の被害多し
一六九六(元禄八)・八・三〇	降雹	中之川にて梅実大の雹降り作物を害す。
一七〇七(宝永四)・一〇・四	大地震	

一七二二 (享保 六)	七・	風雨洪水	暴風雨・洪水
一七二二 (享保 七)	六・	風雨	暴風雨・洪水
一七二四 (享保 九)		干ばつ	食糧の不足・他領より食糧輸入
一七二八 (享保一三)		大雨風	大風・水害と虫害
一七三二 (享保一七)	五・	洪水・蝗害	享保の大飢饉、宇和島領内で多数の人々が飢える。
一七三五 (享保二〇)		洪水	昼夜雨止まず被害甚大
一七五四 (宝暦 四)	九・	大洪水	田畑の流失・他被害大
一七七六 (安永 五)	七・	大洪水	御荘に洪水あり、被害甚大
一七八三 (天明 三)		大洪水	大暴風雨となり、洪水起こる。
一七八七 (天明 七)	六・	洪水	天明三年から七年まで天災相つぎ大飢饉となる。
	七・		水害激しく死人も出た (天明の飢饉)
一八〇四 (文化元)	八・	水害・干害	水害・干害交々起こり、損害甚大
一八二〇 (文政 三)		風雨	風雨あり損害大
一八三三 (天保 四)		飢饉	度々の天災に見舞われ、大飢饉となる (天保の飢饉)

一八五四 (安政元)	一一・	地震	大地震あり、外海浦に津波あり
一八八四 (明治一七)	秋	大暴風雨	鳴動は数日に及ぶ。人々は天地にその鎮撫を祈った。
一八八六 (明治一九)	八・九	暴風雨	大暴風雨あり、農作物の減収甚大。
一八九〇 (明治二三)	九・	洪水	住民は草根・樹皮をとって食とする。
一八九三 (明治二六)	七・八月	干ばつ	暴風雨、大洪水となり農作物・田畑に被害
一八九六 (明治二九)	八・	洪水	豪雨のため大洪水となる。
一九一三 (大正 二)		大洪水	干害・雨乞いをする。
一九二〇 (大正 九)	七・二九	大洪水	暴風雨あり、大洪水となる。
一九二二 (大正一一)		大洪水	前代未聞といわれ、田畑の流失一三五町歩
一九三三 (昭和 六)	七・	干ばつ	家屋の流失・埋没二七戸
一九三四 (昭和 七)		台風	田畑の流失六八町歩 死者一名
一九四三 (昭和一八)	七・二四	大洪水	暴風雨・洪水・三化螟虫の発生

大干ばつ、七〇日以上も日照りがつづく。
室戸台風
本町の田畑の被害大であったが、特に僧都川の堤防決壊城辺町は大被害

一九六七 (昭和四二)	七・九	大干ばつ	台風一六号による町道・河川の損害
一九六八 (昭和四三)	九・二四	洪水	宇和島地震 震度五 町民運動場に亀裂を生じた。
一九六九 (昭和四四)	九・二五	火災	家屋三戸全焼 (町内)
一九七〇 (昭和四五)	六・二	集中豪雨	町道・橋が破壊される。
一九七一 (昭和四六)	八・三	豪雨	台風一九号、二〇号による豪雨で大洪水となり、町道・農地の被害大
一九七二 (昭和四七)	八・三〇	豪雨	大雨
一九七三 (昭和四八)	六・一二	大雨	台風九号
一九七四 (昭和四九)	七・二三	暴風雨	による町道等の破壊
	九・一	暴風雨	台風一六号による町道の破壊
	九・八	暴風雨	台風一八号

※ (各時代の災害の内容は歴史編参照)

一九四五 (昭和二〇)	九・一七	台風	一本松町よりも復旧の救援に趣く。
一九四六 (昭和二一)	一一・二一	地震	枕崎台風の上陸。稲作は半減収となり、食糧不足は深刻となる。
一九四九 (昭和二四)	六・二一	暴風雨・洪水	南海地震 (震度五)
一九五〇 (昭和二五)	八・一三	暴風雨	デラ台風
	九・三	台風	アイダ台風
	九・一四	暴風雨	シェーン台風
一九五一 (昭和二六)	七・一〇	豪雨	キジア台風による洪水
	一〇・一四	暴風雨	ケート台風
一九五二 (昭和二七)	七・	干ばつ	ルース台風による洪水
一九五三 (昭和二八)	六・九	豪雨	台風
一九五四 (昭和二九)	九・二六	暴風雨	洪水、台風
一九六一 (昭和三六)	九・一六	暴風雨	第二室戸台風、大洪水
一九六四 (昭和三九)	七・	干ばつ	日照りがつづき、その後暴風雨、大洪水となる。
	八・二四	洪水	

〔久保盛丸著「おさき権現」より、久保氏上海に渡ったとき
中国の老大人にきいた話として同書にある。〕

七、天災と飢きん

戦国争乱のさなか郷土の農民は田畑を荒らされ収穫物をとられその苦しみははかり知れぬものがあつたがその上、農民にとつて大敵の天災に見舞われることもしばしばであつた。清良記巻一八に次のような記事がある。

○天正元年（一五七三）

「天正元年はいかなる年ぞや。五畿内より東は万作なるよし聞えけるが、山陰・山陽・南海・西海は大旱魃かんぼうにて、前の元龜三年壬申秋八、九月は晴れて雲なく、雨降らず。一〇月の節に入る日より晴れて、冬至の三日前よりまた雨降る。

一二月は春雨のごとく暖かなり。さて天正元癸正月初めより二月彼岸まで雨降らずして、所々の井水かわき難儀せり。彼岸より雨降りて四月朔日までやまず、二日に天晴れしより、また五月朔日まで照りつづき、麦作ことごとく損じ腐りて熟実なし。

五月朔日より七月六日まで雨やまず降りつづき、同月五日の午うまの刻ばかりより雷電おびただしく鳴りひびき、天地震動

して今にも傾けるごとく、男女童衆は氣を失い人氣ことごとく扉を閉ざし、臥して頭をもたげること能わず、魂を失う。翌日六日の昼まで昼夜一二時の間鳴りつづきたり。大洪水にして野原海のごとく、七夕より晴れて九月九日まで雨一滴も降らず……中略……

かく年中不順にて麦・稻損じ、その他雑穀もたらざればその秋死せるもの路頭に横たわる。さるによりて侍さむらいをはじめ百姓に至るまで葛根くずねを掘りて日暮らしの食にあてるといへども事足らず、難儀に及ぶことばかりなり。

（清良記）

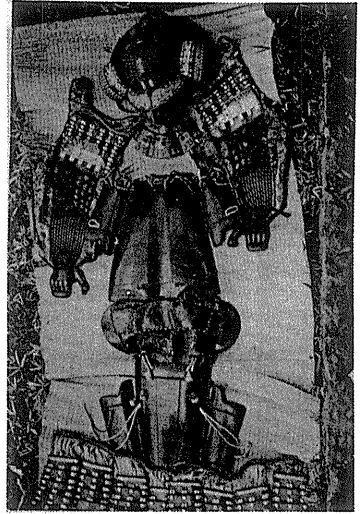
翌元正二年もやはり干ばつに見舞われた。

○天正二年（一五一四）

「天正二年四国・九州ニ一滴ノ雨ナク旱魃セシカバ苗ハ只忙然ト枯シ、田畑トモニ不実、飢饉而餓死難民多カリ」

（大西軍記）

当時本町の住民は戦乱という人災の上に、こうした激しい天災を受け、どのように露命をつないだことであろうか？（清良記の記事は北宇和郡三間地方を中心として書かれたものであるが、本町と同じ南予で天候にはさしたるちがいはなかつたと考えられる。）



田中家のよみ鎧とかぶと兜

現在はそれら諸道具の一部と古文書など一本松小学校の郷土室に寄贈されている。
不鳴条知信の巻に

「田中弥左衛門前方御内用の義も相口段遊御聴候、依之而御扶持方拾人分上下県以旨 享保十己二月上係出」

とあるが弥左衛門は三、四、五代とも同名であるので何代目かは分明しない。

しかし、これによって享保一〇年(一七二五)には田中家はすでに三―五代になっているので田中家の始りはおそくとも元禄時代か、またはそれ以前であったことが推察できる。

第六節 天災悪疫と農民騒動

享保の大飢饉の惨害については第二節、四代村年の項でかなり委しく触れたので省略し、ここでは藩政時代を通じて庶民を苦しめた災害と、これに対する藩の対策について述べることにした。

一、災害の記録

1、御荘組の風水害

宇和島藩政二百数十年間を通じて、領内を襲った災害は愛媛県編年史に記録されているだけでもおびただしい数にのぼっている。

この内、郷土の災害については第一編、第三節気候と災害の節で「一本松町災害年表」に藩政時代の災害が二三件、挙げられている。

そのおもなものはやはり暴風、洪水であった。台風による試練は遠い先祖の時代からの宿命であったといえよう。

一たび風水害に襲われると、石積みだけで作られた河川の提防はたちまち決潰し、田畑の流失おびただしく、一夜にして農民を絶望と窮迫に追いこんだ。

宇和島藩では風水害や干害の際に激甚地域には米や麦を出して難民救済に当つたようであるが、また一方、灌漑用水のために池を作ること奨励したり、河川提防の修理のため「井手川除夫」と称する公役を課し、道路、河川、井堰、溝橋などを修復した。

(1) 築池

水利灌漑はいつでも農民の死命を制する重大問題であつたが、郷土の祖先は財と労力を投じ、苦勞して村内諸方に池を作つた。

宝永二年(一七〇五)に出た「大成郡録」によると本町には次のような池が掘られてあつた。

- 自分池 一ヶ所 正木村(篠川の水が豊富なので少い)
 - 築池二ヶ所 自分池四ヶ所 板尾村
 - 築池一〇ヶ所 自分池六ヶ所 広見村(川らしきものがないのでさすがに多い)
 - 築池三ヶ所 小山村
 - 築池三ヶ所 内自分池二ヶ所 中之川村
 - 自分池 一ヶ所 満倉村
- 池を掘る場合も河川の修理と同様、設計書を藩に提出し藩より米を以て土木費を支給されていた。南予では明治になつてから掘られた池は少く、大部分藩政時代のもの

である。(宇和地帯の民族)

○板尾村の糸右衛門

江戸末期に板尾村に糸右衛門(増田町長の祖先)と称する奇篤な人がいた。板尾村から篠山に通ずる登山道路を修繕する費用にと米一〇俵を寄附した。正木村の人々はこの米を村で公借したこととし、その利息米八斗を得て年二回(旧

三月、一〇月)

山道の修繕を行うことをき

めた。この人

夫は正木各組の廻り持ちとしてずっと継

続したという。

○河川提防の修理

藩政時代に おける土木事業の主たるものは河川提防



河川提防の修理

の修理であつた。宇和島藩ではこれに要する費用を藩で支弁したことは

提川除井堰橋梁等は聊かの場所たりとも領主に於て仕立遣其上年々出水の度毎田地へ押込候土砂取除人足賃迄渡来候処云々 (明治五年七月神山県伺の書面) によつて明らかである。

大成郡録の時代、本町関係分の土木費を挙げてみよう。

いわゆる井手川除夫食米が各村毎に定められていた。

一、米貳石壹斗七升五合六才 井手川除定夫食 正木村

此夫八百七拾人(但明暦元年末年与同三西三ヶ年平等に定)

一、米五斗壹升九合九勺三才 全 右 板尾村

此夫 貳百八人 (全右)

一、米貳斗六升四合九勺三才 全 右 小山村

此夫 百六人 (全右)

一、米五斗八升四合九勺九才 全 右 中之川村

此夫 貳百三四人 (全右)

一、米貳石壹斗四升四合九勺 全 右 満倉村

此夫 八百五八人 (全右)

一、米貳斗九升貳合四勺六才 全 右 上大道村

此夫 百一七人 (全右)

(広見分には記録がない)

右は明暦元年から全三年に至る三ヶ年間に平等に割り付けたものである。この支出の算定は毎年各村浦において工事施行の場所の測量をし、これに必要な人夫役を計画して藩に提出する。藩では関係吏を派遣してさらに測量し夫役を見積り先の計画と照合し相互に交渉を重ねて費額を決定した。

しかし各村浦からの予算は過大に見積り一人役を三人役としたり、三人役を五人役としたが、藩吏はだいたいそれを認めたので村々はこれによつて常に利益を得ていた。

弘化三年の伊関夫帖

一、定 夫 貳百五人 広見村

此井関坪 三拾六坪

此内本川筋

ふまぜ	戸根関	貳間下り貳尺
貳反田	當関	長四間半下り四尺
全所	全	長四間 下り四尺
全所	全	長三間 下り四尺
全所	全	長貳間半下り三尺
流川	全	長貳間半下り三尺
徳田	全	長貳間半下り三尺

天神山	全	長四間	下り三尺
大西	宮関	長三間	下り三尺
内屋敷	全	長六間	下り四尺
全所	全	長五間半	下り三尺
全所	全	長三間	下り三尺
午頭天王上	全	長六間	下り五尺
全所下	全	長五間	下り五尺
弓はりわたせ	宮関	長三間半	下り四尺
鳥落	全	長三間	下り式尺

(虫くいのため不明)

このようにして詳細に各村々の井関修理の見積りが出された。町内関係の井関修理坪数を表示してみよう。

村名	修理坪数	定夫
広見村	三六坪	二〇五人
板尾村	九八坪	五五九人
正木村	一五〇坪	八五五人
小山村	一九坪	一〇八人
中川村	四九坪	二七九人
満倉村	二八坪	一〇六人

弘化三年の井関夫帖を見ると町内関係の井関所在地の地名が出ています。これは地名研究などに参考になると思うので拾って表示する。

板尾村	たせ 鳥落
瀧の下	違野 杉の尾 いけのの 一のせ 中島 中井平
宮の下	よいの申し 田中井手 しけ石
正木村	
拂川	長追 宇和田
小山村	
中通	重内 下神田 樋切 吹ぎこ えぼしはへ 小平
中之川村	
茶宿	出合 おんぢ 梶田 新田 地藏田 屋敷田 中畑
高橋	うすか野 細工田 上田 くぼの平
満倉村	
五瀬井手	片のくし 松野 大井手 岩の川
上大道村	

二、悪疫

悪疫とは一般に悪質な伝染病のことを言った。時間無制限に等しい苛酷な労働と、貧乏の上に厳しい藩の規制を受けた食生活では、庶民の健康状態がよからうはずはなかった。

かつて加えてまだ医学も幼稚であり、庶民の多くは経済的にもすぐ医者にかかる余猶もなく多くは民間医療に頼っていたとき、悪質な伝染病が流行すると、どんなことになったか、その恐怖と惨状は、想像を絶するものがあつたにちがいない。

1、薬草の奨励

享保一三年(一七二八)幕府役人上村小平治が小山村、正木村に来て薬草栽培の状況を視察した記録がある。

「享保一三年中夏、公儀御用上村小平治、薬草爲御用、四国中被相廻候二付、土州ヨリ小山村ニ入来、薬草有之山林ニ入込見合、尤泊り休も行掛之筈ニ付、自然於山林も止宿有之節、爲御用意小屋伐り組被仰付在中へ被遣候。」(不鳴条 智) この調査には、藩から郡奉行、医師、賄方など諸役人も

同道したが、薬草栽培見習いのため、小山村、正木村、長月村、満倉村、岩松村の各庄屋役人なども同道を命ぜられている。公儀御用人は七月一六日、小山村に一泊し、翌一八日に正木村に一泊して篠山を調査し、近永方面へ向けて出発した。民間薬が非常に珍重された時代のことである。

2、コレラの流行

安政五年(一八五八)全国的にコレラ病が流行し、伊予の国各地に広がってきた。当時の惨状を記録によってみよう。

「安政五年九月四日ころよりコロリと申す病氣大流行、長崎より初め大阪、江戸に別して多し、当四国は高松御城下に始まり一日に式百人づつ死す。未だ当所にては少々に御座候えども申し合せて御祈禱、御籠百万辺其外諸社参詣仕候、松山領松前に死人多く……云々」

「近頃長崎辺より相起り江戸辺疫病様二而、吐鳴烈故、暫時二取詰候様之病致流行人痛モ不少……云々」 (伊達家文書) 「当浦にも三四人わずらい岩蔵と申す者病死す。上方筋、

沿革誌の記録により被害の甚大さが知れるが、広見の田畑等の被害が、他の部落に比較して少ないのは、地形の關係による。広見は当時耕地整理の真最中であつた。

2、大正九年の大洪水

大正九年七月二十九日、夜來豪然と降り続く雨に、村内各地域は濁流により、多大の被害を出した。

村内の損害は次の通りである。

水田流失 五四町八反三敏九步

畑 流失 一三町一反二敏二步

宅地 一、九〇〇坪

山林決潰 三町五敏一七步

(後年町内に当時のツイホゲの跡が各所に見られた。)

死者 一名

「一本松村会議案綴」

当時の細部にわたる記録は現在しないが、洪水体験者の手記により、往時の状況を知ることができる。

「大正九年七月二十九日篠つくような夜來の豪雨は瞬時やまらず降り続いて、正午ごろには物凄い雷鳴まで加わり、この世の終りかと思われた。やがて川に溢れた濁流は岸壁を砕き橋を押し流し滔々として稲田の中へ溢れ込むのが見られた。

二年前に父に死なれた後、一家の柱となつて二〇才にな

つたばかりの長兄は朝から落ちつかずいらしていたが、田が濁流の底になつたのを見ると、「川に飛び込んで死ぬる」と叫んで走りだした。すると母が矢のように飛びついて、「短気なことをするな。たくさんのおとどいをどうするのぞ」と何回も泣き口説きながら心死の力で引き戻した。

一夜明けると、空が真青に晴れて真夏の太陽がざらざらとさしはじめた。私は長兄の後について田へ行つて見た。ついでこの間四番草をとり終り丹精こめて育てていた美田が見渡す限り石礫壘々たる川原となり果てて、青いものは何一つ見えなかった。兄は茫然と立ちつくしていたが、やがて地にべったり坐つておい泣きだした。

この塚田という田は大正二年の大洪水で流され川原となつていたのを死んだ父と兄とで五ケ年もかかつてきれいに復旧した水田である。

この労働が崇つて父は心臓を患い宇和島市立病院に入院してその治療中悪性のスペイン風邪が重つて死んだのだつた。

わずかの田地を少しでも手放してはならないと身をすり減らして守つていたのに？ それを幼い弟妹にも一つ話していたのだが：兄が激流の中に飛び込んで死にたいと言つたのも、い

まおいおい眼の前でつき坐つて泣いているのも決して無理ではないと私は思った。一家が非痛のドン底にあつたとき、さらに新しい悲報が入つて来た。

下の小林常小父さん(母の従兄弟)が川湯である日、激流に呑まれて行方不明になつたというのだ。何でも城辺から闘牛を見て帰り道、息子の義雄さんと一しよだつたが義雄さんはいやうやく助かつたそうだ。

しらせを聞くと兄はすぐかけつけた。母は後で上りがまちに腰をかけていつまでもいつまでも涙ぐんでいた。

一〇年もたたぬうちに二回も大洪水に会い、なけなしの田地を流失して一家は破産に擯した。二番目の兄と三番目の兄は運悪くこのような時代に小学校六年を終つたが、高等科にも進めず二人ともわずか一才の幼けなさで相次いで近所の叔父たちの家へオトコシ奉公に出された。

木枯しの吹く冬の一夜そつと帰つてきた兄がひどい赤ぎれを訴えて、「もう叔父の家へ帰るのはいや」と泣きじゃくっているのを母がなだめて追い帰すのを見た。

いよいよ途方に暮れた長兄は意を決して城辺方面の高利貸の家へ行つて当面の助けを求めた。すると先方では「金は貸すが担保はあるか」と言った。担保は家やしき付近の田地だという

と「そんなやせ地では担保にならぬ駄目だ」とにべもなくはねつけられ、力なく悄然と帰つてきた。

借金もするあてがないのでとうとう部落の人々に無尽をしてもらつて当面の急場をきりぬけたが、その後のやりくりに苦しみ、死守していた持地の一部を手放したり、政府の低利資金を借つて、辛うじて一家は露命をつないだ。

そのころ、私と妹はまだ小学校在学中であつたが、貧乏の苦しさが子供心にしみじみと身にしみ、欲しいものがあつてもめつたに買つてくれとねだつてはいけなないと思ひ続けた。

三度の飯も芋飯とつめ飯にたくわんのおかずばかり、白米の飯は盆と正月などの門日で年数回に過ぎなかつた。稀に鯛でも買ったときは小さい一匹の鯛を妹と二人で半分ずつ分けてもらつたべたこともあつた。よくも栄養失調にもならず粗食に堪えられたものだと思はれる。

大洪水を体験した加州幸吉は、当時小学校三年生であつた。後年幼時の記憶をたどり記録していたものという。

「加州幸吉手記」

二、螟虫の被害

南宇和郡に於ては、田植は従来から各地域において自由に始めていた。

稲作の二三化螟虫の被害が、次第に増大しはじめたのは、明治四〇年より四四年代にかけてである。南宇和郡の如き暖地では、被害は特に広域にわたって発生した。大正期に入っても、被害は一向おとろえなかつた。

大正一二年（一九二三）及び一三年（一九二四）の連続被害は、農村に物心共に大打撃をあたえた。収穫も間近い一〇月はじめ、村内一円の水田は一夜にして、見渡す限り無惨な白穂と化した。

本町では二度の大洪水と、打続く経済不況等により、日常生活は深刻の度を増々大きくしたさなかのことである。県および郡内各関係機関では、早くより対策が検討された。その結果大正一三年から、稲作を晩稲に切換え、水田定植は六月二日以降の実施等の決定をみている。

また、苗床の管理、塩水選の実行、正常植などの細い点に至るまで指導をしている。

当時は防虫剤がなく、害虫駆除はほとんど人手により行われた。郡内の農会は、学校の児童生徒による駆除を要請している。学校では、蛾か卵の補獲を奨励した。又教師が引率して、苗床で蛾や卵を取った。

○其の他の災害

推定記録があるのみ。

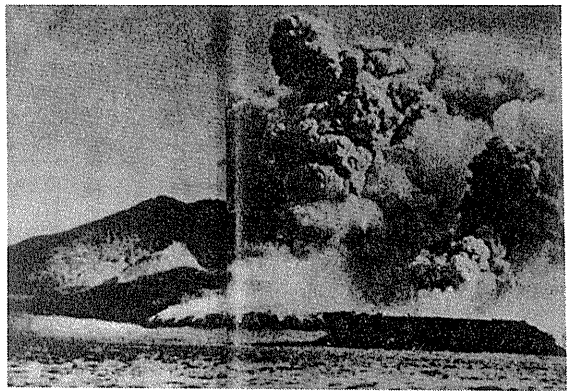
死者 九万二、八〇二人 行方不明 四万二、二五七人
罹災者 三四〇万余人 負傷者 五万二、〇七四人
家屋の全焼 四四万七、一二八戸
全壊半壊 一二万余戸
物的損害二七億より二〇〇億等各種推定あり、日本銀行の推算、四五億七、〇〇〇万円

当時の（大正一一年）国の一般会計予算額一四億七、〇〇〇万円、この比較により災害の甚大さが知れる。このとき外国からの救援物資が多で、アメリカからは八〇〇万ドルの救援金を受けている。



関東大震災を報じた新聞

大正三年、鹿児島県桜島が突如大爆発を起こした。記録によると、死者九、六〇〇名を出している。本町は遠距離



桜島大爆発

であるが、大爆発の灰が降ってきて、日中暗くなる程であったという。

大正一二年（一九二三）九月一日、関東大震災が発生し、東京及び周辺は焼野ケ原の状態となった。郷土

では、義捐金や見舞品を募集し災害地に送った。関東大震災は、直接郷土には影響はなかつたが、社会不況に一段と深刻な影響を及ぼしてきた。

関東大震災の被害状況については、確実な記録はなく

三、スペインかぜの流行

大正七年（一九一六）一〇月より、翌八年にかけて、スペイン風邪が大流行をし、猛威をふるった。

中国大陸から襲来したという悪性の流行性感冒で、全国に広がり、死者一五万人を出している。

この病気の特徴は、発熱悪寒がとまらず、極めて死亡率が高かつた。郷土においても、連日罹患者続出し、多数の死人を出した。伝えるところによると、「毎日のように葬式の行列が続き、墓地という墓地は、毎夜、燈明で一杯になった」という。

当時適切な予防法もなく、医師の処置、治療も手が届かず、死者の続出となった。また学校では、児童の出席が半減し、運動会や学芸会を全部中止したという。

その後大正一〇年（一九二二）上大道にコレラが発生し大騒動となる。（宇和島、八幡浜においては、九年に大流行をしているが、村内全域に広がることなく静まった。）

しかし赤痢の発患が度々あり、大正一一年（一九二二）には、腸チフスが広範囲に発生し、避病舎が収容満員の状態となり、処置に困難をきたした。

当時から、ようやく予防注射が使用され始め、村民の衛生思想の普及も高まり、罹患者は以後減少してくるようになった。